

特集

現地報告・ミンダナオ島 フィリピンバナナの現実

小林和夫 / こばやし・かずお
(株)オルタ・トレード・ジャパン政策室

日本人のバナナの年間購入量は、1994年以來りんごやみかんを抜いて生鮮果実の中でトップの座を占めてきた。そのバナナはどこから来るのか？ 実に日本で流通しているバナナの94.5%がフィリピン・ミンダナオ島で生産されている(2012年統計)。ドールやデルモンテでおなじみの多国籍アグリビジネスが直営するプランテーションのバナナである。安価で大衆的な果物になったバナナの背景に、労働者の権利侵害や大量の農薬散布が問題視されて久しいが、最近のプランテーション・バナナの現実について私たちは限られた情報しかもち得なかった。

今年、(株)オルター・トレード・ジャパン(ATJ)とAPLAは、新しく調査活動を開始した。ミンダナオ島のバナナ・プランテーションで今、何が起きているのか、それに対してバランゴンバナナの民衆交易はどのような意味をもって地域に根付いているのか。

今号では、その予備調査として訪問したミンダナオ島の最近の様子を紹介する。(編集部)



マニラ フィリピン

ネグロス島

ミンダナオ島

マキララ。ダバオ

レイケセブ。ツピ

ミンダナオ島は、ルソン島についてフィリピンで2番目に大きな島。北海道の約1.3倍の広さに1400万人が暮らす。

ミンダナオ島ダバオ市にあるバナナ・プランテーション。

特売商品の目玉となるほどに安価なフィリピン産バナナが、プランテーション労働者の安い賃金と大量の農薬によって支えられている実態を調査し、痛烈に批判したのが鶴見良行氏の著作『バナナと日本人』(岩波新書、1982年)である。農民を強制的に立ち退かせて開設したプランテーションにおける劣悪な労働条件、農薬による労働者の健康被害や環境汚染、労働運動に対する弾圧など、日本人が知らなかった産地の現実を明らかにした。また、頻繁に散布される農薬(主に防カビ剤や収穫後に軸腐れを防ぐために使用される防腐剤がバナナの皮や果肉に残留するため、食べる側の安全性の問題も指摘された。

国内のバナナ市場に目を向けると、今も多国籍企業のラベルが貼られた安いバナナが主流である一方で、30年前にはなかった有機栽培バナナ、フェアトレード・バナナ、高地栽培バナナなど、ブランド化されたバナナが登場している。とりわけ、寒暖差がある標高の高い地域で栽培するため甘みが乗るとアピールされたフィリピン産の高地栽培バナナはこのスーパー

「オルタナティブ」って—音楽と農業とバナナと

秋山澄兄 / あきやま・すみえ
一般社団法人BMW技術協会事務局長



ロックンロールは1950年代に、黒人音楽と白人音楽が融合して生まれた。チャック・ベリーやエルビス・プレスリーなどがパイオニアで、やがて英国に波及、ビートルズ、ローリング・ストーンズが生まれた。その頃からロックと言われるようになり、サウンドはよりハードなものへと変化し、ジミー・ヘンドリクス、レッド・ツェッペリンなど70年代都市から発信され一握りの天才的なアーティストが主流だったロックンロールから、ニューヨークやロサンゼルス、ロンドンといった大都市を拠点に企業がシステム的に作品を生み出すロックの時代へと変遷した。優れたプロデューサーの重要性が増し、運営側が主導権を握り、マーケティング重視の構造に組み込まれた。しかし、その商業支配に対して、アーティスト自身が作品で否定するといった自己矛盾を底流に持ち続けていることは、ロックの面白いところでもある。

「は死んだ」と世界中で言われた。その後90年代に入り、米国からニルヴァーナ、政治的活動や思想的メッセージでインパクトを与えたレイジ・アゲインスト・ザ・マシン、英国からレディオヘッドなど、多くの天才的なバンド、アーティストが世に出た。これらはジャンルロックとも言われオルタナティブ・ロックの象徴と称された。作品はアーティスト主導、レコード会社を自ら選ぶ、あるいは自分で作るという独自の展開、アーティストの個性、サウンドだけではなく、色々な意味で「オルタナティブ」だった。2000年以降はポストロックが出てきて、独創的なサウンドと個性的な活動が目を引き、商業的な王道には乗らずに、それぞれが独自の路線を築いている。一方で、商業支配のロックの灯りも消えていない。

さて、恐れ多くも『ハリナ』にて、何でこんなことを書いてしまったのか。ふと、ロックを日本の農業やバナナに当てはめてみたらどうなるかと思ったのか。たまにはロックを大音量で聞いて、脳天をプチ抜きたい。■

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

CONTENTS ■ HALINA 25 2014.08.01

- 02 Relay Essay ポコポコ 25 「オルタナティブ」って—音楽と農業とバナナと ©秋山澄兄
- 03 [特集] 現地報告・ミンダナオ島 フィリピンバナナの現実 ©小林和夫
- 08 [Topics] ジンバブエ—「石の家」で土地への熱い想いを聞く ©近藤康男
イスラエル政府の人権を蹂躪した「行政拘禁」 ©野川未央
- 10 [Column] Kakao Kita カカオ民衆交易奮闘記 ⑦ カカオでバブアの森を守る! ©津留歴子
マニラ・ジブニー通勤 ① ジブニーから見えるマニラの日常をご紹介します。 ©小川二美子
ロクサエの歌が聴こえる ① TIMOR LORO SA'E ©野川未央
美味しいマンガ ① 『銀の匙』 ©安藤文将
- 12 わたしの友達友消しまん ① 山形県・米沢『moto808』の巻 ©山本典子
- 13 APLA食堂 ⑤ エコシュリンプ ©赤石優衣、大久保ふみ、廣瀬康代
- 14 [Voice from APLA partners] 【ネグロスより】新しくネグロスに駐在した寺田です!
- 15 事務局だより

表紙のことば

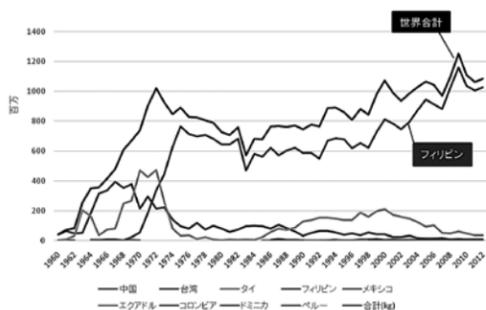
タイスは東ティモールの女性
が織る伝統的な装飾品です。昔
からお祝いごとや儀式の際に用
いられてきました。その昔は、家
畜などの取引の単位として使われていたとも聞きます。様々な形と色柄がありますが、一般的なものはスカーフからバスタオル位の大きさで、慣習的な儀式や客人を迎える際に相手の首にかけます。山間部の村では、厚手で大判の毛織りのタイスで暖を取っている光景を見かけることもあります。最近では、お財布や携帯電話入れなどに仕立てたものや、植物染料と天然素材で作ったものなど、女性グループやNGOが新たな市場の開拓に取り組んでいます。独立後12年を迎えた東ティモール、タイスを眺めている人びとの笑顔やこれまで歩んできた道に思いが巡ります。(義村浩司)

でも販売されている。スーパーで「スウィーティオ」「極選」「甘熟王」といったブランド名のバナナを見かけた方も多いだろう。「バナナと日本人」から32年。バナナ・プランテーションの実態はどうなっているのだろうか。調査主任の市橋秀夫さん(埼玉大学教員)、オルター・トレード社(ATO)社長のヒルダ・カドゥヤさん、そしてATJフィリピン駐在員の黒岩竜太さんとともに2014年2月9日、ミンダナオ島の最大都市であるダバオ市に降り立った。

プランテーションでは今

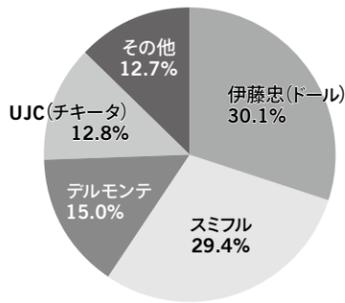
ダバオ市から車で3時間、雲の

日本のバナナ輸入量(kg)の生産国別推移(1960~2012年)



(出典:財務省貿易統計)

日本の企業別フィリピンバナナ輸入割合(2013年)



(出典:2013年度輸入青果物統計資料)

合間から時折顔をのぞかせるフィリピン最高峰のアポ山(標高2954メートル)の麓をぐるっと回ってコタバト州マキララ町に到着した。コタバト州、南コタバト州は、パナイ島やネグロス島から移住したイロongo語圏の人びとが多い。マキララ町では2000年以降、ドールがバナナ・プランテーションを開発し、その面積は11000haに及んでいる。その一つ、200haのプランテーションが開設されたA村の村長から直接話を聞くことができた。

「村には約300世帯の先住民族、ムスリム、ルソン島やビサヤ地方からの入植者が住んでいる。

地元で雇用の機会が少ないため、住民はプランテーション開発を歓迎した。農民は土地のリース料も手に入るし、プランテーションで働くこともできる。当初は1000人以上の労働者が働いていたが、作業は簡易であるためそれほど人手を要さず、現在は500〜600人程度が働いている。大型機械による農業散布は3日に1回、労働者の手による散布は毎日実施される。農業散布後1時間は立ち入りが禁止されているが、1時間後もバナナから農業は滴り落ちてくる。農業を吸引してか気絶、卒倒して病院に運ばれた労働者の事例もある。私の家もプランテーションの近くにあるため、風向きによっては農業が飛散してくる。プランテーションのすぐ隣に小学校の敷地があり、農業の飛散が心配だ。ドールは幹線道路と村を結ぶ道路を整備したり、村にある小学校に図書を寄付しているが、それ以上に子どもの健康が大事ではないか」。そして、農民が労働者になると、自ら土地を耕していた農民が怠惰になってしまったと感じてしまうと付け加えた。村長はバラ

バナナ労働者の話

プランテーションで働いた経験のある人で取材を受け入れてくれる人を探すのはなかなか大変だった。何とか伝手をたどってスミフルの農園で働いていた元労働者2人の体験を聞き出すことができた。

女性労働者Bさん

(30歳、スミフルの農園で4年間勤務)
「バナナのパッキングセンター

の労働時間は8時間。梱包する数量のノルマがあり、残業はザラだった。毎朝6時から働き始め、時には深夜、朝方まで働かなければならない。最悪のケースは翌朝7時まで勤務が続いたことがある。1時間の休憩の後、午前8時からまた働き始めた。日曜日も休みはなかった。私は独身だったけれど、子どもを持っている女性も同様の条件で働いていた」。

男性労働者Cさん

(30歳、Bさんは別のスミフルの農園で3年間勤務)

「プランテーションの広さは約350haで700人ほどの労働者が働いていた。農園で農業を散布する作業に従事したのち、2カ月間だが農業の原液を混ぜる業務に就いた。農業は強力で、作業中はいつも気分が悪くなった。食欲もなくなり、夜も不眠に悩まされた。この仕事は本当に嫌だった。農園でナップザックの農業を散布する場合、1日200リットルのノルマがある。友人は農園で農業を散布する作業に従事したが、散布の後には常に頭痛と痒みが生じた。会社から防護装備を提供されたが、暑さのため正しく着用せず、ハッ

ド・インジエクシオン後に衰弱して23歳で亡くなった労働者もいる」。

2人とも基本給は政府の最低賃金レベルは支払われ、残業手当も付いた。Cさんの場合は社会保険、医療保険も完備していたというが、労働条件の劣悪さは否定しようがない。農業禍を含めて鶴見氏が告発したバナナ農園における多国籍企業の人権蹂躪、環境破壊の構造は大きくは変わっていないように思われた。

条例を無視した農業散布がいたるところで

元労働者からの証言にも出てきた農業使用の現状はどうなっているのだろうか。ダバオ市で農業の空中散布に反対する運動を展開しているIDISというNGOによると、農業(防かび剤)の空中散布はコタバト州、ブキッドノン州では条例で禁止されたものの、大規模なバナナやパイナップルのプランテーションが広がるダバオ市周辺や南コタバト州などでは依然続いているようだ。

空中散布するのは早朝、風が弱い時間帯。軽飛行機が通学する子

どもたちの上を通り過ぎる。農園労働者はもちろんのこと、風で飛散した農業は飲料水や生活用水の水源(川や湖、泉)を汚染し、近隣の野菜畑や居住地域も汚染する。政府はプランテーションと学校、川、公道、居住地の間に樹木などで緩衝地帯を設けることを義務付けているが、実際には守られていない。若干古い調査となるが、2006年、ダバオ・デル・スール州ハゴノイ町でフィリピン大学医学部が実施した調査が示唆する問題は深刻だ。何年にもわたって農業の空中散布が実施されているバナナ・プランテーションに隣接しているカモカン村の住民の健康状態を調査したものだ。

カモカン村では、殺菌剤である「黄色の粉」が散布された直後に80%の人が目の症状(痛み、充血、涙、かゆみ、ぼやけ)、頭痛やめまい、皮膚の痒み、咳などの症状を訴えていた。そうした急性症状以外にも、農業散布に起因する様々な症状、具体的には子どもの発達障害、伝染病に対する抵抗力の減退、甲状腺がん、血液疾患、神経障害が診断された。約3分の1の住民の血液から殺菌剤の成分が見つかった。

た。土壌や空気にも残留農業があった。調査結果に基づき、調査団は農業の空中散布の中止を求めた。プランテーション近隣で生活する住民に農業被害が起きていたことは衝撃的だ。プランテーションで働く労働者の健康被害はもっと深刻であると危惧される。

先住民の暮らしを支えるもうひとつのバナナ

ネグロス島から始まったバランスバナナの民衆交易は、その後、地域を拡大して2000年にはミンダナオ島に産地を展開した。現在、ミンダナオ島には4つのバランスの産地があり、輸入量全体の40%を占める重要な産地になっている。ミンダナオ島においてバランスはどのような意味と役割を持ち得るのだろうか。それも予備調査の目的の一つだった。

予備調査で訪問したのは南コタバト州レイクセブ町、ツピ町、そして前述のコタバト州マキララ町の3産地である。
レイクセブ町の生産者の多くは先住民のオボ族である。オボ族は森の中で狩猟・採集生活を長く送ってきた。しかし、近年、商業



幹線道路脇で見かけた空中散布時間の告知板。2月15日~17日午前5時半~8時半とある(ダトゥ・バグラス町)。

バランゴン生産者インダウさんの圃場はアポ山中腹に広がる。右はドンボスコ財団代表のベツツイーさん。



下流にある水田地域は頻発する鉄砲水による被害に悩まされる。それは地元の人にとっては食料問題に直結する。輸出用バナナを食べることはないが、コメは主食だからだ。

さらにドールはドン・ボスコ財団の近くでもプランテーションを拡大しようと狙ってきた。プランテーションの進出を阻止するため、ドン・ボスコ財団はオーストリアの財団の資金支援を受けて土地を購入することを決意する。購入した60haもの土地は、地元の農民に農地改革の制度を活用して配分した。その土地でバランゴンが植え

ては「一時的な勝利だ」という。こうした状況に置かれているマキララ町の農民がバランゴンと出会ったのは非常にタイミングがよかったと言えるだろう。バランゴンは農民の暮らしを保障し、プランテーションを阻止するオルタナティブとなる。さらに、アポ山の貴重な環境と森林も守ることがで

る。その一人、インダウさんが所有する圃場を見学した。標高1000メートル近い畑のすぐ上はアポ山の環境保護地区であり森林が広がっている。空気は爽やかで、泉が湧いていた。そのまま飲むこともできるきれいな泉は一年中枯れることがない。ここにプランテーションが開発され、散布された農薬が下流に流れることを想像するだけで鳥肌が立つ。

いのち・自然・暮らしを取り戻す

配分された土地で生産性をあげ、生活に十分な収入をあげられて、初めて農民は土地を守れる。プランテーション拡大を虎視眈々と狙っている多国籍企業の誘惑に負けない暮らしの基盤作りが大切だと語るベツツイーさん。現状については「一時的な勝利だ」という。こうした状況に置かれているマキララ町の農民がバランゴンと出会ったのは非常にタイミングがよかったと言えるだろう。バランゴンは農民の暮らしを保障し、プランテーションを阻止するオルタナティブとなる。さらに、アポ山の貴重な環境と森林も守ることがで

る。多くの日本人は多国籍企業による「Dirty Toxic Banana（汚い毒のあるバナナ）」を購入している。それはミンダナオの大地、労働者の健康を損なっていることを知ってもらいたい。日本では国土の70%が森林に覆われていると聞いたが、フィリピンの森林は過去に日本への商業用木材の輸出、そして現在は高地栽培バナナのプランテーション開発で破壊されている。ベツツイーさんの言葉が重く響く。

25年前、バランゴンは飢餓や貧困に苦しむネグロス島の人びとの暮らしを支えるバナナとして登場した。それはまた、多国籍企業を介さずに地場バナナを輸出するという、草の根の経済システムをつくる挑戦でもあった。そして、1980年代に高まった多国籍企業批判を背景に安全・安心なバナナを求める消費者に高く評価され、支持された。

マキララ町、ひいてはミンダナオ島におけるバランゴンの意義は、貧しい零細農民を支援するネグロス島のそれと重なる部分もあるが、異なる側面もある。先住民族の自立支援、ムスリムとクリスチャン

物や加工品の販売事業まで手掛けている。コメは国内だけでなくEU、香港やマカオにも輸出している。また、ドン・ボスコ財団はプランテーションの農業空中散布問題に取り組んでおり、マキララ町があるコタバト州で空中散布を禁止する条例を制定することにも貢献した実績がある。

代表のベツツイーさんにはプランテーション・バナナに対する特別な思いがある。ベツツイーさんは大学生のとき、一冊の本に出会い衝撃を受けた。本の題名は「The Human Cost of Bananas」。

農業漬けのバナナを生産する労働者の健康被害、農業の空中散布で暮らしを脅かされる近隣住民、環境汚染など、日本に輸出するバナナ生産が引き起こすコスト（犠牲、代償）について書かれていた。とはいえ、当時プランテーションは生産と輸出に便利な港湾近くの平地で開発されていたので、ベツツイーさんにとっては本の中の世界にとどまっていた。しかし状況は2000年になって変わる。日本で高地栽培バナナの人気が高まり、マキララ町にもバナナ・プランテーション進出の計画が持ち上がった。

の共存、環境保全、そして何よりベツツイーさんの言葉通り「バランゴンはプランテーション・バナナに抵抗する武器」となり得る。

これまでバランゴンは、日本の消費者の間ではプランテーション・バナナのオルタナティブとして支持された。バランゴンを通じて、ミンダナオのプランテーション労働者や農民を環境破壊、健康被害や貧困から解放することができたとき、はじめてバランゴンは生産者にとっても消費者にとっても命、自然、暮らしを支えるオルタナティブ・バナナとなるだろう。ベツツイーさんのアピールを日本の消費者の皆さんに聞いてもらいたいと心から思う。

た。町役場は雇用創出につながると歓迎したが、プランテーションの危険性を本を通じて知っていたドン・ボスコ財団は強く反対した。だが、反対運動は失敗に終わった。プランテーションでの雇用を希望する人びとが「NGO（筆者注：ドン・ボスコ財団のこと）、仕事をくれ！」と訴える声に対して何も応えられなかったからだ。

マキララ町の主要作物のゴムの価格が急落し、ゴムは先行きがないと感じた農園主が我先にと農地をバナナ・プランテーションにリースした。02年、農地を転用し、森林を伐ってマキララ町にプランテーションが開設された。以降、

オボ族の生産者ホイエットさんは栽培指導員も兼任。採集生活に慣れたオボ族が栽培管理の考え方を理解するには大変だという。



レイクセブは風光明媚な観光地。湖の周辺ではプランテーション開発が禁止されている。

マキララ町は昨年よりバランゴンを出荷しはじめた新産地だ。バランゴン出荷団体であるドン・ボスコ財団は1984年に設立された農民を支援するNGOである。持続可能な有機農業を推進しており、有機農業の研究・研修、種の自家採取や保存、食品加工、農産

**多国籍企業の進出に抗して
—ドン・ボスコ財団の取り組み**

収入源になっていることは明らかだったが、同時に、若い世代が山バナナであるバランゴンを育てることで山間地に定住し、オボ族独自のアイデンティティ保持に役立っていることも見て取れた。

また、ツピ町のバランゴン生産者協会では、ムスリムとクリスト教系入植者が共に活動しており、地域の平和共存にも寄与していた。

代表のベツツイーさんにはプランテーション・バナナに対する特別な思いがある。ベツツイーさんは大学生のとき、一冊の本に出会い衝撃を受けた。本の題名は「The Human Cost of Bananas」。

農業漬けのバナナを生産する労働者の健康被害、農業の空中散布で暮らしを脅かされる近隣住民、環境汚染など、日本に輸出するバナナ生産が引き起こすコスト（犠牲、代償）について書かれていた。とはいえ、当時プランテーションは生産と輸出に便利な港湾近くの平地で開発されていたので、ベツツイーさんにとっては本の中の世界にとどまっていた。しかし状況は2000年になって変わる。日本で高地栽培バナナの人気が高まり、マキララ町にもバナナ・プランテーション進出の計画が持ち上がった。

た。町役場は雇用創出につながると歓迎したが、プランテーションの危険性を本を通じて知っていたドン・ボスコ財団は強く反対した。だが、反対運動は失敗に終わった。プランテーションでの雇用を希望する人びとが「NGO（筆者注：ドン・ボスコ財団のこと）、仕事をくれ！」と訴える声に対して何も応えられなかったからだ。

マキララ町の主要作物のゴムの価格が急落し、ゴムは先行きがないと感じた農園主が我先にと農地をバナナ・プランテーションにリースした。02年、農地を転用し、森林を伐ってマキララ町にプランテーションが開設された。以降、



ムスリムのバランゴン生産者の一人、ミリアムさんは夫に先立たれた。「女手では大変な収穫は、手数料を払うと協同組合が肩代わりしてくれるので助かる」と話す。

ジンバブエ—— 「石の家」で土地への 熱い想いを聞く

近藤康男 / こんどう・やすお
アジア農民交流センター

今年2月、初めて訪れたサバンナの国、ジンバブエ。シヨナ語で「石の家」を意味する9世紀から続く王国である。その語感の与えるイメージと違い、緑が多いのが印象的だった。田舎を車で走り、村を歩いてみると地表には石がゴロゴロしている。我々が訪問した村の一つムパタ村も、小高い場所は巨大な岩盤だ。11世紀から19世紀に栄えたシヨナ族を中心とするモノタバ連合王国が建設した巨大な石造建築が各地の遺跡に残っている。

今、この国ではアグロエコロジーに基づいた家族農業の取り組みが進んでいる。訪問したムパタ村は、ジンバブエ有機農業小農民フォーラム(ZIMSOFE)とジンバブエの伝統に拠る自然生態系を保全する活動家の協会(AZTRERC)の活動拠点だ。電気も水道もない村だが、手が届くような満天の星空が感動的だった。

ZIMSOFEは2002年発足の



ムパタ村の大歓迎。

農民組織で、全国1万9000世帯の農民が参加してアグロエコロジーを推進している。今年からはピア・カンペシーナの国際事務局を引き受け、女性議長のアムボフさんがジンバブエ側の調整役を務めている。AZTRERCは1985年に発足、霊媒師・独立戦争戦士・部族の首長などが中心となつて伝統的な知恵や技術などを持続可能な農業や環境保全に適用して活動するユニークな団体だ。

この地域では、男女の区別なく申請者一人当たり40haの土地(家族農業用に食糧生産向け8ha、永年作物向け32ha)が政府によって配分されている。主食であるトウモロコシや豆類、トマト、果物など、自分たちが日常的に食べるものが作ら

れているほか、役牛の飼育など、家族農業の在り方が表れていると感じさせられた。

土地への強い気持ち

今回の訪問で一番知りたかったのは、2000年に始まった白人が所有する大農場の強制収用後の農業の状況、そしてアフリカ各地で多発している外国資本による農地収奪についてだった。1930年、英国の自治植民地下で(当時は南ローデシア)土地分配法により白人には無制限の所有が認められ、国土の50%以上におよぶ肥沃な土地で、少数の白人入植者が大農場を展開する一方、先住民族は耕作不適地に追いやりられ、25万頭にのぼる家畜も奪われた。

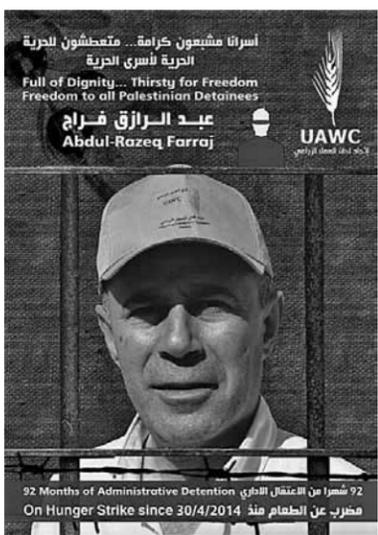
1980年にジンバブエ共和国として独立した後の農地改革では、接収した白人農場の土地に対して旧宗主国の英国が補償することになっていたが、農地改革そのものがほとんど実行されないまま終了し、土地の再配分は進展しなかった。そうしたなか2000年6月から先住民族による農場占拠が始まり、それを政策的に支える形で1100万ha、5000農場が2年間の間に政府により強制収用され、A1モデル(自給的家族農業15万農家、計500万ha)とA2モデル(中大規模の商業的農場2万2000

イスラエル政府の 人権を蹂躪した 「行政拘禁」

野川未央 / のがわ・みお
APLA事務局

2014年5月末、パレスチナのオリブオイルの出荷団体であるパレスチナ農業開発センター(UAWC)から、APLAの関係団体である(株)オルター・トレード・ジャパン(ATOJ)宛に緊急声明が届きました。

「UAWC財務・会計責任者のアブドゥル・ラザック・ファラージさんが、イスラエル当局に、理由もなく拘束されている——」。イスラエルには、政府が「危険人物」とみなした一般市民を礼状なしに拘束することができる法律があり「行政拘禁」と呼ばれています。拘禁の理由は開示されず、6カ月と定められている拘禁期間も、更新によって無期限延長が可能という基本的人権を完全に無視した制度です。ファラージさんは、過去にもこの行政拘禁されているとのこと。UAWCは、今回の緊急声明の中で、1、人権団体や国際的な連帯組織に対



ファラージさんの釈放を要求するポスター。

して、公正な裁判を受けるといふ基本的な人権を侵害する行政拘禁の方針をイスラエル政府が取り下げるように働きかけること

2、国際社会に対して、イスラエル当局が行政拘禁者を即時釈放し、命を守るよう圧力をかけることを呼びかけています。

報道が隠す死をも辞さないハンスト

残念ながら、この件については日本ではまったく報道されませんが、イスラエルの刑務所には、この法律によって不当に拘束されているパレスチナ人が何百人もいるといわれています。UAWCによれば、4月末、自らの人権を求め、また、それを侵害する行政拘禁制度の廃止を求め、ファラージさんを含む120人以上の被拘禁者たちがハンガーストライキに入りました。

しかし、イスラエル監獄側はその要求には一切応えず、むしろ拘禁者たちに対して、懲罰的な措置を取っているようです。UAWCから日本に連絡が入った時点で、ハンスト開始からすでに一カ月。死をも辞さない姿勢で

長期に渡るハンストを行っている彼らが非常に厳しい健康状態にあることは想像に難くありませんが、家族や弁護士との面会も許されていないため、詳しい情報はなかなか届いてきません。ATOJやAPLAでは、ファラージさんをはじめ、ハンスト中の被拘禁者の方たちの身を案じながらも、オリブオイルの消費者をはじめとした日本の市民への情報発信、駐日イスラエル大使館に対する嘆願書の送付(結果的には、受け取り拒否となって戻ってきてしまいましたが、同じ嘆願書をFAAでも送付しています)など、日本でできることを進めるしかない日々が続きました。

その後、6月24日には、開始から約2カ月前にハンストが中止されたという連絡がUAWCから入りました。その中にはファラージさんも含まれているとのことですが、相変わらず直接

2万4000農場、計240万haに配分された。2005年にはそれらの農地は国有化され、それ以降、元農場主による土地をめぐる訴訟は無効とされた。国際的な批判にさらされた食料危機やハイパーインフレに関しては、前述の政策も関係しているが、早魃の影響も大きいとのこと。しかし、人びとの間での食料不足の問題はなかったよう

だ。また、外国資本による農地収奪は、表向きは存在せず、ジンバブエ人以外には所有権も利用権も持つことはできない。これは、英国植民地下で入植者が大半の優良農地を奪っていった過去の歴史が大きく影響しているようだ。ムプフさんの「ジンバブエ人は土地とは離婚できない」との言葉にも表れている通り、農地への愛着は強い。

それでも「後継者の問題が一番難しい」とムボフさん。また、外国資本による支配についても、タバコ・綿花・砂糖キビ・大豆などについては、契約農業形態により、流通・加工・輸出を押さえる多国籍企業(ブリティッシュ・アメリカンタバコや中国企業等)の実質的支配がジンバブエでも広がりがつつあるようだ。

〔注1〕社会や自然のシステムを有機的につなぐ経済的にも地域自立が実現可能なシステムを作り出そうとする運動であり、科学である。

〔注2〕中小農業者の世界的運動体で1992年設立、69か国148の組織が参加し、構成員は2億5千万人

面会はず、健康状態などについての詳細情報は不明のままです。

その後、6月中旬に行方不明となっていたイスラエル人入植者3人が遺体で見つかり、それに対するパレスチナへの「報復攻撃」としてのガザ地区への空爆が続いていることは日本のメディアでも報道されるものの、7月8日現在、行政拘禁に関する続報はどこにもあがりません。ファラージさんたちが命を懸けたハンストは、行政拘禁という制度そのものへの抗議行動でしたが、イスラエル側は「行政拘禁」という制度について、その信念や内容を変更する意志は無い」とのコメントを出しています。そして、イスラエルのネタニヤフ首相は、前述の3人が誘拐・殺害された事件を「ハマスによる検挙のための捜査を続けてきました。その過程で、少なくとも6月12日以降で167人に対して行政拘禁令が適用され、7月2日時点での被行政拘禁者の数は364人にとどまるといふ情報が入ってきています。空爆という無差別攻撃はもちろん、隠された人権弾圧についても抗議を続けていきます。

〔注〕緊急声明の全文はATOJのウェブサイトでご覧いただけます。
http://altertrade.jp/archives/5696

03

ロロサエの歌が聴こえる 01

Ego Lemosの世界

野川未央 / のがわ・みお
APLA事務局

TIMOR LORO SA'E

東ティモールを代表するミュージシャン、エゴ・レモスの楽曲を今号から6回にわたり紹介する。

オーストラリア映画『Balibo』の主題歌で最優秀オリジナル映画音楽作曲賞を受賞した経験があるエゴだが、「音楽について学校などで勉強したことはない。自分のハートから湧き出るインスピレーションだけを頼りに音を奏で、言葉を紡いできた」と語る。

音楽好きな両親の影響を強く受け、子どものころから音楽に親しんできたが、インドネシア占領期に父親と兄弟を亡くした彼にとって、自分自身を癒すもの、それが音楽だった。そんなエゴが歌うのは、環境、平和、そして長年にわたって苦難の歴史を歩んできた郷土への愛。東ティモールの公用語であるテトゥン語のメッセージはシンプルだからこそ力強く、親しみやすいメロディに乗って、聴く者の心に響く。

2009年にオーストラリアのレーベルから出された彼のファーストアルバム『O HELE LE』に収められた楽曲のうち、まずは故郷・東ティモールについて歌った『TIMOR

『LORO SA'E』を紹介したい。東ティモールの公用語・テトゥン語で、「ロロ」は「太陽」、「サエ」は「昇る」、つまり「ロロサエ」は「日の出」またはその方角である「東」を表す。東ティモールの人たちにとって、故郷は「太陽がいつの島、ティモール」なのだ。

Timor oan iha tasi balun
Keta haluha ba rai Timor
Tamba rai Timor lta hotu nian
Mai lta hamutuk hare ba oin
Hodi harii Timor foun ida
Ba lta oan ho beioan sira

世界中に散らばるティモールの子どもたちも
ティモールの地を決して忘れないで
なぜって、この大地はほくらみんなのもの
集まろう、未来のを一緒に思い描こうよ
東ティモールという新しい国を築くために
ほくら子どもや孫たちのために

(訳:野川未央)



アルバム『O HELE LE』は、iTunesで購入可能
<https://itunes.apple.com/jp/album/o-hele-le/id337548982>

04

美味しいマンガ 01

『銀の匙』 安藤丈将 / あんどう・たけまさ
荒川弘(著)、小学館(発売) 武蔵大学教員

食と農は、マンガの中でも人気のあるジャンルの一つです。『美味しんぼ』のような古典的なものから新しいものまで、次々と雑誌に連載されています。人気の秘密は、私たちの食べものとの関わりを鋭く、そして面白く描き出しているからで、マンガと言ってバカにはできません。今回は、『銀の匙』を取り上げます。『週刊少年サンデー』で2011年に連載が始まったこのマンガは、アニメ化、映画化もされたので、一度は目にしたことのある方もいるかもしれません。都会育ちで訳あって北海道の農業高校に通うことになった八軒くんの目を通して、農という異世界を、驚きを交えながら描き出します。農業高校で次々と新しい発見をしていく主人公が、人間として変わっていくというのが物語の軸です。発見の一つは、食べもののおいしさを知ったこと。ピザを食べたことのない同級生のために、ピザづくりに奮闘します。小麦粉、野菜、ベ

ーコン、チーズ、すべて校内産の食材でつくった絶品のピザを味わいながら、自分が今まで何気なく食べていたものにも、こだわりを持ってつくっている人びとがいることを学びます。『銀の匙』で描かれているのは、農の世界の楽しい話ばかりではありません。主人公の同級生の駒場くんは、実家の小さな牧場が倒産し、家計を助けるため、突然学校を退学してしまいます。家族経営で休む間もなく働く同級生の家族が廃業に迫られたのを見て、八軒くんは酪農の厳しい現実を学びます。他の同級生たちの会話から、借金を抱えている農家を駒場くんの家だけではないことを知らされます。酪農経営が直面する困難は、現実のもので、日本の酪農に関するデータによれば、2011年の搾乳牛一頭当たりの農業所得は、2004年の約7割にまで下がっています。本文には出てきませんが、もしTPPが成立して、外国から安い肉や乳製品が入ってきたら、主人公の友人たちの実家は、どうなってしまうのだろうかと考えずにはいられません。このように時に重苦しい話も入りますが、基本的にはラブコメなので、肩の力を抜いて食と農の世界を覗き見ることができます。

農の世界をラブコメで読む

01

カカオキタ kakao kita

カカオ民衆交易奮闘記

7

津留歴史 / つる・あきこ
オルター・トレード・インドネシア社現地駐在員

「カカオは私たちのものだ」というカカオ生産者のサルモン一家。

先住民のアイデンティティを失うことにほかなりません。このバーム農園開発の流れに真っ向から異を唱えている女性があります。ジャヤバラ県開発局のハナ・ヒコヤビ局長です。自身もバプア人であるハナさんは、バーム農園開発はバプア人の未来を閉ざすと危機感を抱いているのです。先日、カカオ輸出事業体カカオ・キタの代表デッキーさんからハナさんの事務所に呼び出され、「生産者がカカオに未来を託せるよう真剣に支援をしていきましょう」とハッパをかけられました。ハナさんによると、最近では「病虫害に見舞われてお手上げだ」とやる気をなくしている生産者が多く、こういう人たちに企業が「土地を売らないか」といった話を持ちかけるのだそうです。カカオでもしっかりと生計を立てられるという確信を生産者が持つように、持続的な買付けと畑の改善による生産性向上と一緒に取り組んでいくことが買付手側に求められています。単なる換金作物としてのカカオではなく、バーム農園開発からバプアの森を守るという意味でも、森の中でカカオを元気に育てることを、森の所有者でもある生産者と消費者である私たちが一緒に考えていきたいと思います。

カカオでバプアの森を守る！

先住民のアイデンティティを失うことにほかなりません。このバーム農園開発の流れに真っ向から異を唱えている女性があります。ジャヤバラ県開発局のハナ・ヒコヤビ局長です。自身もバプア人であるハナさんは、バーム農園開発はバプア人の未来を閉ざすと危機感を抱いているのです。先日、カカオ輸出事業体カカオ・キタの代表デッキーさんからハナさんの事務所に呼び出され、「生産者がカカオに未来を託せるよう真剣に支援をしていきましょう」とハッパをかけられました。ハナさんによると、最近では「病虫害に見舞われてお手上げだ」とやる気をなくしている生産者が多く、こういう人たちに企業が「土地を売らないか」といった話を持ちかけるのだそうです。カカオでもしっかりと生計を立てられるという確信を生産者が持つように、持続的な買付けと畑の改善による生産性向上と一緒に取り組んでいくことが買付手側に求められています。単なる換金作物としてのカカオではなく、バーム農園開発からバプアの森を守るという意味でも、森の中でカカオを元気に育てることを、森の所有者でもある生産者と消費者である私たちが一緒に考えていきたいと思います。

02

マニラ・ジープニー通勤 1

小川二美子 / おがわ・ふみこ
マニラ在住、会社員

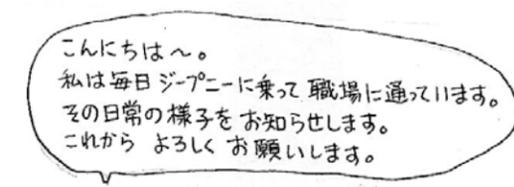
ジープニーから見えるマニラの日常をご紹介します。

こんにちは、『ハリーナ』読者の皆さま。私はマニラに住んで21年になります小川二美子です。フィリピン人の夫と結婚し、子どもはいませんが幸せに暮らしてきました。「暮らしてきました」と過去形で書きましたのは、昨年、農作業中に夫が耕運機の事故で亡くなったからです。傍らにいた相棒が突然いなくなってしまったので、呆然とした毎日でした。でもあれから1年が経ち、今はかなり元気になりました。

私のフィリピン生活を表現したら「ジープニー通勤生活」というのが、ピッタリに思えます。大企業の駐在員のように、運転手つきの車が迎えに来る豪華な通勤者ではありませんし、退職永住者のように、あくせく働くことから解放された優雅な身分でもありません。フィリピン人庶民と同じようにジープニーに乗って職場に通勤し、雑然とした街角で途中下車して夕食の買いものをする、普通の生活者だからです。

そんなジープニーの中から見た、マニラの人たちの暮ら

しぶりを、今号から、私のつたないイラストで紹介させていただきます。



APLA 食堂

Kitchen APLA

05

今日の食材 **エコシュリンプ**

レポーター
赤石優衣 / あかいし・ゆい
大久保ふみ / おおくぼ・ふみ
 APLA事務局
廣瀬康代 / ひろせ・やすよ
 APLA理事

強力粉の代わりに
 しらかの会の
 玄米粉を使用しました。

APLA食堂では、ATJ/APLAで扱っている食材を利用したレシピをご紹介します。手の込んだ料理も素敵ですが、もっと手軽に使っていただけるように、“誰でも簡単に作れる”レシピをお届けします。

トルティーヤ

エビがよいアクセントとなるトルティーヤ。いろんな野菜を混ぜて召し上がれ。

●生地

【材料(6枚分)】

- 強力粉.....200g
- なたね油.....大さじ1
- ぬるま湯.....130ml
- 塩.....少々
- ベーキングパウダー.....小さじ1/2

【作り方】

1. ボウルに上記の材料を全て入れ、ゴムベラで混ぜる。
2. ビニール袋に入れ、一塊になるまで捏ね、30分程ねかせる。
3. 6等分にし、麺棒で丸く伸ばす。
4. フライパンで両面を軽く焼けば完成!

●具材

【材料(6枚分)】

- エコシュリンプ.....6尾
- 白ワイン.....大さじ3
- 塩.....少々
- キャベツ.....適宜
- パプリカ.....1個
- きゅうり.....1/2本
- トマト.....中1/2個
- 人参.....6cm
- アスパラガス.....3本
- ソース
- マヨネーズ.....大さじ3
- 豆板醤.....小さじ1/2
- すし酢.....小さじ1/2
- オリーブオイル.....大さじ1/2

【作り方】

1. 解凍したエコシュリンプを、塩で軽くもみ洗う。
2. 鍋に1.と白ワイン、塩を入れ、中火で3分程茹でる。茹で上がった皮をむき、縦半分に切る。
3. キャベツとパプリカを千切りにする。きゅうりと人参はパプリカと同じ長さに切り、千切り。アスパラガスは、火を通したあと、パプリカ・きゅうり・にんじんと同じ長さに切る。
4. トマトは湯むきした後、種を取り、6等分する。ソースの材料を全て混ぜソースを作る。
5. トルティーヤを広げ、具材をお好みでのせる。その上にソースをかけて巻けば完成!



レシピ提供: クチーナ (ATJのホームページにも、エコシュリンプのレシピが載っています。http://altertrade.jp/ecoshrimp/recipe)

今回の雑学

2013年、世界的にエビ不足となり、国際相場価格が高騰したというニュースを見た方も多いと思います。なぜそんなことが起こったのでしょうか。

現在、スーパーなどで販売されているエビは、バナメイという種類がほとんどです。バナメイは、APLAで販売しているブラックタイガーのエコシュリンプとは違い、より密集した状態で養殖でき、病気にかかりにくいといわれています。しかし、2011年頃から早期死亡症候群(EMS)と呼ばれる病気が広がり、現在の主要生産国である中国やベトナム、タイなどで次々と流行し、2013年には生産高が激減しました。感染症の被害が最も大きいのが、生産量の8割を輸出していた、世界第二位の生産国であるタイ。その生産量は、50万トンから25万トンと半減してしま

した。実は、バナメイの病気以前に、ブラックタイガーなど他のエビも密飼いされた結果、水や土壌の汚染などで養殖池が使えなくなったり、エビ自体が病気になった過去があります。

エコシュリンプは、1平方メートルあたり約3尾と、広い池の中でのびのびと育ち、多様な生態系の中で他のエビや魚と共存して過ごします。人工飼料や抗生物質も使われていないため水の汚染が極めて少なく、収穫時は海水の干満を利用したり、プラヤンという仕掛けや網、手づかみによる手法など、最小限の動力を利用して行われています。いわば、環境保全型のエビです。環境やエビ自身に負担がかかっているエビと、環境を守っているエコシュリンプ。今度エビを食べるとき、そのエビはどうやって育ったのか、少しだけ思い浮かべてみてください。

【参考文献】日本経済新聞「世界的なエビ不足なぜ起きた カキでも同じ問題」有路昌彦
 http://www.nikkei.com/article/DGXNASFK10020_Q4A110C1000000/ (2014/06/10取得)

自慢する人

山本典子 / やまもと・のりこ
 みんな農園経営、しらかの会(企)組合員

東

京から山形県の白鷹町に居を移して7年。公私共に農業や化学肥料・添加物に極力頼らない農業生産と加工に携わる暮らしのなかで、元来の外食三昧の悪癖が改善しました。さらにこのお店の料理を知ってしまったために、ますます他のお店が必要なくなってしまう。そのお店とは『moto808』。

野菜大好き! お料理大好き! の姉妹が切り盛りする、野菜料理レストランです。

店主の菅谷ユリ香さん・妹の舞子さんのお宅のかつての家業は八百屋さん。店名の由来ともなったその店舗を改造し、15年前に野菜料理店を始めたユリ香さんは、食材を求めるなかで有機栽培された野菜のおいしさに目覚め、縁あって白鷹町の有機・無農薬栽培の野菜と出会いました。その関わりは私も従事する農産加工グループ『しらかの会』へと引き継がれ、現在は他の提携生産者とともに我が家の小規模農園もその末席に加えていただいています。

栽培方法!! おいしさという基準をクリアした旬の野菜なら大歓迎、はねもその規格外も無駄なく使い、素材のそ

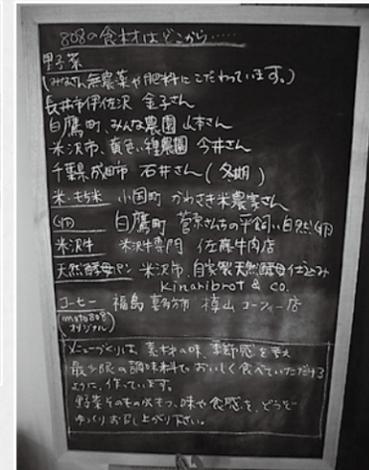
わたしの友産友消じまん 01

もとやおや
 山形県・米沢『moto808』の巻



店主のユリ香さん(左)、舞子さん。

もとやおや
野菜料理店 moto808
 山形県米沢市信夫町3-46 《電話》0238 (23) 6376
 不定休のため、事前予約の上でのお出かけがおすすめです。



店内には食材、生産者についての紹介ボードがあります。



季節野菜のサラダランチ1,600円。メインはサラダ! 玄米ご飯、スープ、お惣菜3品、デザート、飲み物がつきます。



レタス、大根、ニンジン、ジャガイモ3種、スイスチャード、コラード、アイスプラントなど... 全20種類以上の野菜が、おがみたくなるようなおいしさでした。

の時々の特徴と旨みを生かし、必要最小限の味付けで調理する。サラダ・スープ・惣菜・デザートへの展開の仕方は、実に目からうろこの獨創性にあふれています。他の食材も地元置賜地域の懇意にする方々の農産物や生活クラブ生協の消費材を中心としています。

「おいしい野菜があるからこそ、こうして料理を作り続けることができる」とユリ香さん。駆け出し農家の私たちは、お皿の上で思わぬ変身を遂げた自分の野菜たちに驚き、それが見知らぬ人たちの口福となる喜びを味わっています。料理を通じて新たな出会いの口が広がり、励まされ、農業を続けていく原動力をいただいていることに感謝しています。

moto808さんとの関わりで感じるのは、価値観や想いの距離の近い仲間が日々各々の持ち場で生産し、時に得意分野を持ち寄り、一緒にものや暮らしをつくり上げていくことで、より多くの人たちの接点が生まれ、共感や共有の裾野が広がるような手ごたえです。白鷹から米沢までは車で小一時間。moto808さんとはそんなよい関係をずっと保ち続けたいと願っています。

編集後記

ハリーナ編集委員、理事・評議員を中心に「時局懇談会」がスタートした。古めかしい名称だが、私たちを取り巻く様々な状況を捉えながら、APLAの視点をピリッと打ち出していこう、という意図。第一回目は「新しい食料レジームとオルタナティブ」をテーマに農業・農民・地域の問題を語り合った。ネグロスや東ティモールの仲間とも今後こうした議論を交流させたいなあ。(大橋)

今号の特集ではフィリピンのバナナ・プランテーションの今を追いましたが、TOPICSのジンパブエ、コラム「Kakao Kita」のインドネシア・パプア州の状況として伝えられたことが、因らずもリンクした1冊になりました。多国籍企業による土地収奪とそこに住む先住民や人びとの対峙が世界のどこでも起こっていることが分かります。今年は国連が定めた「家族農業年」。今時代が求める問題解決の方向性がそこにあることが見えてくる号となりました。(吉澤)

「珍しくて見栄えもするし、いいね!」と言っていたくことの多いハリーナの表紙。ご存知の通り、アジア地域の織物を撮影して表紙にしています。フォトグラファーの方のご自宅で一度にまとめて何号分も撮影してもらいますが、光の加減や引きと寄りの具合、一枚の織物の中でもどの部分を切り取るか、などによってまったく違う表情を見せてくれるのが興味深いですね。持ち主の方に寄せてもらうその織物にまつわるストーリーも毎号楽しみにしています。(野川)

ハリーナ HALINA

2014年8月号 vol.02-no.25
2014年8月1日発行

【編集長】
大橋成子

【編集者】
吉澤真満子、野川未央

【表紙写真】
長倉徳生

【デザイン・制作】
十年舎

【編集・発行】
特定非営利活動法人APLA
(APLA/あぷら: Alternative People's Linkage in Asia)
〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
tel. 03-5273-8160
fax. 03-5273-8667
e-mail info@apla.jp
URL http://www.apla.jp

【印刷】
株式会社セイズ

【事務局だより】

事務局の動き(2014年5月～7月)	
5月 9日～15日	ネグロスへ吉澤が出張しました。
5月 11日	NPO法人ジュレー・ラダック、ジュマ・ネットとの共催で「エスニックフェスタ—Stands Up for Your Rights—」を開催しました。
5月 24日	APLA第7回総会開催。
5月 25日	東京朝市アースティマーマーケットに出店しました。
6月 2日	兵庫県西宮市(Cowork'in Kurakuen)で「ホンモノの手作りチョコレートワークショップ」を開催しました。
6月 3日	香川県高松市(Coworking Space gain-Y)で「ホンモノの手作りチョコレートワークショップ」を開催しました。
6月 9日～21日	フィリピン北部ルソン・ネグロスへ秋山、吉澤が出張しました。フィリピンに設置されているBMWプラントの定期チェックにも立ち会いました。
6月 14日	上智大学グローバル・コンサーン研究所主催「国際家族農業年と人びとの食料主権—国連食糧農業機関 (FAO) のパラダイム転換を学ぶ」にATJと協力しました。
6月 18日	武蔵大学でAPLAの活動に関して野川が講演しました。
6月 19日	アユス仏教国際協力ネットワーク総会に出席しました。
6月 25日	埼玉県・松山高校で「ホンモノの手作りチョコレートワークショップ」を開催しました。
6月 28日	カフェ・スローで開催された「カンタ! フェスタ」に出店しました。
6月 29日	東京朝市アースティマーマーケットに出店しました。
7月 15日	文化学院の授業で取材を受けました。
7月 18日	東京都・神田女学園中学校高等学校で「ホンモノの手作りチョコレートワークショップ」を開催しました。
7月 20日	東京朝市アースティマーマーケットに出店しました。
7月 21日	NGO緊急集会とキャンドル・アクションStop! 空爆〜ガザの命を守りたい〜に主催団体として参加しました。
7月 22日	成蹊大学でAPLAの活動に関して野川が講演しました。
7月 24日～31日	グリーンコープ主催青少年ネグロス体験ツアーが開催され、吉澤とネグロス・インターン寺田が同行しました。
7月 24日、31日	地球環境基金若手プロジェクトリーダー研修に野川が参加しました。

事務局からお知らせ

「福島の子どもたちに届けよう バナナ募金」へご協力を!

20施設、約1400人の子どもたちへバナナの発送を継続してきていますが、依然としてバナナを通じて福島との関わりが必要であると感じております。募金額が減少してきております。皆様のご協力、よろしく願いいたします。

以下の呼びかけに賛同・参加しました。

- ODA大綱4原則における「非軍事主義」理念の堅持を求める市民声明
- エクアドル大統領宛て抗議文(ハビエル・ラミレス氏の即時釈放、フニン村に逗留中の鉱山開発公社ENAMI-CODELCO及び警官隊の即時撤退の要請)
- NPO法人制度・税制度に関する要望事項
- イスラエル大使館宛て嘆願書(パレスチナ行政拘禁者に対する即時釈放を求めます)
- 駐日イスラエル大使宛て[共同声明] ガザ地区に対する無差別攻撃の即刻停止と国際人道法に則った市民の保護を強く求めます。
- 日本国外務大臣、外務副大臣宛て[要請書] イスラエルによるガザへの軍事攻撃を即時中止させ、ガザの封鎖・市民への集団懲罰を止めてください。

From Negros, Philippines [ネグロスより]

新しくネグロスに
駐在した寺田です!

昨年(2013年)はボランティアとして5カ月間、KFIRCに滞在していました。

今KFIRCは、農場の自立運営をめざして、日々みんなで努力しています。昨年から大きな変化は、スタッフや研修生が全員でKFIRCの生産・経営状況を把握し、お互いに思っていることを提案し合うミーティングを毎週1回実施していることです。日本では、簡単なことじゃないかと思われるかもしれませんが、ネグロスの農民たちには、数週間先、数カ月先のことを考えて仕事をすることがあまり根付いていません。そうしたなか、KFIRCでは、みんなで問題を把握し、自発

みなさん、初めまして。この4月よりAPLAの現地インターンとしてネグロスのカネシゲファーム・ラルキャンパス

(KFIRC)に駐在

的にミーティングを持ちはじめたという事は、以前に比べて、とても大きな変化だと実感しています。

KFIRCのルーラル・キャンパス(農民学校)は、農場での研修を終えた卒業生たちが地元で活躍することをサポートする重要な役割も持っています。卒業生の1人であるマーヴィンは、子豚を育て肥育豚を販売するとともに、豚の糞尿をもとにした液肥を畑や田んぼに撒いて、KFIRCで学んだ循環型農業を実践しています。近所の農民もマーヴィンから液肥をもらって、自分の畑に撒いているそうです。初めて訪れた時には、雑草や岩だらけの何もない空き地だった場所に、立派な豚舎とそれを中心にした畑が広がっています。この様子を初めて目にしたとき、正直とても驚いたのと同時に自分のことのように嬉しかったです。このように、卒業生たちがそれぞれの地元へ帰り、彼らが中心となって、各地域の発展に向けて奮闘しています。みんなそ

れぞれ課題を抱えています。それでもKFIRCで学んだことを実践し、少しずつ着実に成長していています。現在の研修生たちも卒業後に各地で活躍し、やがてはネグロス全体が盛り上がりつつあることを願っています。

KFIRCは、2013年に被害をもたらした台風30号(ヨランダ)の被災地支援を実施しているASIN(Alternative Solidarity Initiative Network)のメンバーとしても活動しています。日本でAPLAやATJが呼びかけた募金の一部がASINによる活動を支えています。ASINの復興支援活動は、現在、第3段階にきています。第1段階は物資の緊急支援、第2段階はポトヤチャベル、家などの修復、第3段階は人びとの生活上支援です。第3段階の内容は、医療支援、トラウマ対策、給食支援、教育や人びとの組織化、生計支援などを予定して、第2段階と合わせて支援を進めていきます。ASINには、教会関係、アーティ



左が寺田。マーヴィン君(右から二番目)の豚舎の前にて。

ストなど様々な分野のメンバーがいます。ASINにしかできないようなワークショップや心のケアなど、多岐にわたった活動をしていく予定です。

こういった活動が、私たちのような外部からでなく、フィリピン国内の内側から起き

ていることに大きな意味があると思っています。

今後、KFIRCやASINなどの最新の情報をAPLAのホームページやFacebookでみなさんに発信していきます。ぜひ覗いてみてください! (APLA現地インターン: 寺田俊) ■